

# 「小笠原母島 感動の旅」

桑田 直宏

## □小笠原へのアクセス

12月29日～1月3日まで一度は行ってみたいと思っていた小笠原の母島旅行をしました。小笠原諸島は2011年に世界自然遺産に選ばれましたが、目的は星空とザトウクジラのウォッチングです。

小笠原諸島へは船が唯一の交通手段となっていて、東京の竹芝桟橋から新おがさわら丸に乗船して父島まで約1000kmを24時間かかります。飛行機なら地球の裏側のペルーまで行ってしまう時間です。しかも船は外洋に出ると大きく揺れ、船酔いする人にとってはそれだけで躊躇してしまいます。実際、帰りの船は大揺れに揺れて、立って歩くことが困難な状況となりました。じゃあ、そこまでして行く価値があるかと聞かれたら、私は「ぜひ行って見て！きっと感動するから。」と答えます。ただし、海や山などの自然が好きな方でないと向こうでは何もすることがありません。



昨年7月に就航したばかりの新おがさわら丸の設備は快適でした。私は特2等船室にしたので、寝るだけのスペースしかないのですが、食堂に行ったり、デッキで富士山や伊豆諸島の島々を撮影したりと楽しい時間を過ごすことが出来ました。



## □母島の魅力

翌日の11時頃に父島に到着しました。母島へは小さな船に乗り換えてさらに2時間かかります。母島は人口わずか450人で、この沖村が唯一の集落です。宿泊も100人だけのキャパです。バスもタクシーもありません。食料品店は1店舗だけありますが、内地からは週1便の船でしか食料が届かないので、日持ちのするパンや食料品しかありません。まともなレストランがないので、お昼は宿泊した民宿でおにぎり弁当を作ってくださいました。自然以外「何もない」が母島の売りなのです。私の最大の目的は星空です。周囲360度太平洋の絶海の孤島で、光害が全くない星空を自分の目で体験したかったので、この環境は望むところです。



初日は島のどこで観望するかのロケハンにさっそく出かけました。小さな村を歩いていると、前から地元の中学生ぐらいの女の子が歩いてきました。近くに来ると頭を下げて「こんにちは」と声をかけてくれたのです。また別の子供と出会った時も挨拶をしてくれました。民宿のスタッフもみんな親切でした。島の人は私達を「お客様」というより「家族」のように心を開いて親切に接してくれました。



元旦に地域のイベントに参加してみたのですが、450人の島民はみんな知り合いのようで、若い男の子が近所のお年寄りの方一人一人に丁寧にあいさつしています。ここでは昔の日本の家族や地域のつながりが残っています。今は残念なことです。私の娘には知らない人に声をかけられたら無視をなさいと教えています。えらい違いです。



うみがめ料理

#### □小笠原の星空

2日目の夜はほぼ快晴となり、民宿の方をお願いして車で観測地まで連れて行ってもらいました。そこは南側に太平洋が広がる絶好の場所です。午後11時ごろにはオリオン座や冬の天の川が南中します。赤道儀を組み立て、極軸を合わせようとすると、北極星がどこにあるのかしばらくわかりません。空が暗くて星が輝いているのと北極星が低い位置にあるからです。オリオン座が天頂に近いところに輝き、カノープスは姫路で見るシリウスぐらいの位置に感じます。冬でも夜の気温は20度近くあって寒くはありません。天文ファンならこういったところで小笠原にいるのだと実感できるかも。

空の暗さは想像以上で、こんなに濃く見える冬の天の川は初めてです。さすがは環境省の調査で日本一になっただけのことにはあります。撮影でも暗さを実感しました。ニュージーランドと同じカメラとレンズで撮影したところ、テカポではシグマ 16 mm F2.8 レンズを ISO800 で 180 秒が適正露出でしたが、ここでは 300 秒でも OK でした。

しばらく見ていると、天の川の一部がぼんやりと白く広がっているのに気づきました。対日照だと思われます。この時期は天の川と重なるためにわかりにくいですが、撮影してみても一応写っているようです。

誤算もありました。小笠原では全天晴れることは少なく、雲が流れてきます。露出の途中で雲が入るために満足できる写真は撮影することが出来ませんでした。双眼鏡や肉眼で見る冬の天の川は言葉ではなかなか表現できない美しさでした。



### □日本一早い初日の出

元旦は4時に起きて南端にある小富士山の登山に出かけました。日本で一番早く初日の出が見られということでたくさんの方が来られます。テレビ局も取材していました。幸いにも水平線近くは雲がなく、ここでは4年ぶりにきれいな初日の出をみる事が出来ました。私は300mmの望遠レンズで撮影しましたが、狙いはグリーンフラッシュでした。初日の出と日の入りの2回撮影に成功(?)しました。それにしても南の島で見る朝日や夕日はどうしてこんなにきれいなのでしょうか。小笠原諸島独特の地形と植生の美しさとともに心に焼き付けておきました。



### □小笠原固有種

小笠原を満喫するにはハイキングが一番。昼間は乳房山に登りました。標高463mは小笠原諸島の最高峰です。約4時間の健脚向けになっていましたが、小笠原固有植物の宝庫であり、母島にしか生息していない特別天然記念物の鳥「メグロ」を見ることが出来ました。登山道の途中には第二次世界大戦中、アメリカ軍がグアムに帰還中に残った500キロ爆弾を落として出来た大きなクレーターや日本軍が築いた塹壕などがありました。



### □ザトウクジラウォッチング

12月～4月にかけてはザトウクジラを見ることが出来ます。ははじま丸に乗れば高い確率でクジラを見ることが出来ると書いてあるので期待していましたが、一頭も見ることがなく港に着いてしまいました。何度も訪れている方に聞くと、2月から3月にかけてのベストシーズンは嫌になるほど見ることが出来るとか。



それでも朝や夕方に海をしばらく見ていると、ザトウクジラのブロー(息継ぎ)やスラップ(尾びれたたき)、ブリーチ(ジャンプ)を見ることが出来ました。とくにブリーチは豪快で、遠くでも音が聞こえるのですが、広い海のどこかに突然飛び出してジャンプするので、撮影は困難でした。



## □母島式見送り

帰る日になりました。小笠原が感動的だったのは実はここからでした。心から親切にしてくれたスタッフにお別れをして、車で港まで送ってくれました。ははじま丸に乗り込み、デッキに出てみると、観光や宿泊の方だけでなく、一般の島民の方もたくさん集まってきました。さっきお別れの挨拶をしたスタッフたちも見送りに来てくれています。いよいよ出港となるとスタッフが笑顔いっぱい「いってらっしゃい」と声をかけてくれます。子供たちは一生懸命に打楽器をたたいてくれます。旗を振る人もいます。島民の方もみんな手を振ってくれています。

感動はさらに続きます。汽笛が鳴り、船が岸壁から離れていくと、見送ってくれる人が岸壁ぎりぎりまで寄ってきて一段と大きく手を振ってくれるのです。まるで家族を見送っているかのようです。船が動き出すと若いスタッフは手を振りながら突堤のところまで追っかけてく

れているではありませんか。そしてジャンプして海へダイブ！立ち泳ぎしながらも手を降ってくれるのです。その振る舞いは単なるパフォーマンスではなく、心からしてくれたものと感じました。その姿を見ていると感動で涙が出てきました。



## □こころが打ち震える感動！

「小笠原名物、お見送りダイブ」

父島に着くとすぐに新おがさわら丸に乗船です。いよいよ東京竹芝に向けての出港です。乗り込むと乗客はすぐにデッキに向かいます。何かを待っているかのようにデッキが人でいっぱいになりました。出港の時刻が迫ってくると「航海安全 皆再会」の願いを込めて小笠原太鼓が始まりました。ここでも父島の観光関係のスタッフだけではなく、島民の皆さんもいっぱい集まって二見港が埋め尽くされています。

宿泊客やツアーに参加してくれた人にスタッフが大きな声で呼びかけて手を振っています。「〇〇さん、ありがとう。また来るよ」と乗客が返しています。



ここでも感動はこれで終わりません。

島民の皆さんの温かい見送りが終わり、船が動き出すと、今度は船の見送りが始まりました。



新おがさわら丸と一緒に並走して、クルーザーや魚船から手を振って声をかけてくれます。それも数隻ではありません。その両側に何十隻もの船が沖まで一緒に並走してくれるのです。

その光景を目の当たりにすると、それはもう感動モノです。そして最後は一隻ずつ近づいて海に豪快に飛び込んでくれるのです。海に飛び込んだ人は立ち泳ぎしながらもまだ手を振っています。乗客はそのたびに拍手をし、「ありがとう！また帰ってくるね！」の連呼です。

この光景を目にした後、周りの乗客を見ると、感動して笑顔になる方、思いが込み上げて涙が止まらなくなっている方がたくさんいました。島全体でこんな素晴らしい見送りなんてなかなか経験できません。私も見ていると涙が止まらなくなりました。



これまで仕事で海外や国内の素晴らしい観光地や一流のサービスを経験してきましたが、それとは対極のところ「心が打ち震える感動」がありました。「人の心からの感動」が一番です。

いつかまた小笠原に行くぞと決意しています。